

お目に掛りますから子。』と、子之助は悲しさうに申しまして、フト立ち上りました。

『さうへ、南風が眼に沁みるツて……秋の風が吹くんで……ちやふ前他處へ行くツて死んで終ふことなの?』と京ちゃんは初めて思ひ出したやうに、可哀想になつてハラへと満しい眼から涙を落しました。

『はい、秋になりましたから神様のお定めに随つて私は死ななければ成りません。』と子之助も覺悟はして居りまして矢張り淋しく思つたなのでせう。サメぐと泣いて居ります。京ちゃんも堪へ切れずに、袂を顔に當てて泣き出しました。

京ちゃんは、ハツと思つて見ますると、もう小蝶子之助は居りません、京ちゃんは驚いて。

『子之助! 子之助!』と續けざまに呼びましたが何人の返事もありませんでした。

その明日も、その又明日も、子之助の行衛を探しましたが、遂々行方が知れなかつたのです。

京ちゃんは永い月日を暮らして來年の春の来るのを心淋しく待つて居るでせう。小蝶子之助は秋の風に連れられて、神様のお側へ歸つて終つたなのです。

(小蝶子之助の巻をはり)

吝嗇の誠

小島松之助

『京ちゃん又來年春逢ひますから、隨分達者で居て下さい』と小さい聲が遠くに聞えますので

ドクトル、スキフト氏は第十七世紀の末に於ける英國知名の文學者にして、夫のガリバー、トラ

ベル即ちガリバーの旅行日記を書き當時の社會を嘲り飛ばしたる人なり。氏は性質淡泊にして稍輕卒なりしが、又有名の吝嗇家なりき。

スッキフト氏の家に、

其友人より數々菓實或は

遊獵の獲物など進物とし

て持ち来る一小童ありけ

り、然れども氏は流石文

學者にして淡泊なるが爲

に未だ一度も少しの心付

けだになしたるとなかり

けり。

或る日小童例の通り澤山の進物を入れたる籠を

待ち來り、スッキフト氏の門戸を敲けり、氏は自

おもすびとれだんごとか
けづくらをしました、いつでも
れもすびがまけますから、な
ぜ、そんなにはやいのですかと
れもすびがききましたら、わ
たしいつもあづきつけてい
ますからとれだんごがも
ーしましたとき

ら戸を開きて之を迎へたり、小童いと無作法なる
顏色にて曰はく「茲に私の主人が進らせし澤山の
物があります」とドクトル先生は小童のいかに
も無作法なる舉動に氣を
損じながら、曰はく『入
ひれよ小僧よ御前は駢が
悪い様に思はれるが凡べ
て使ひは町噂にせねばならぬものだぞ、私が御前に
其作法を教へてやるからね……今假りに小僧御
前がドクトルスッキフト

で私が使ひであるとせよ』といひながら、ドクト
ル先生其帽子を脱いて小僧に一揖して曰はく「ド

クトル様よ。これは私の主人が進めまるらせしもので粗末の品で御座いますが、幸に御受納下さるれば寛に有難き仕合せに存します」といひたり。されば只今のドクトル(即ち眞の小僧)は「寛に有り難し、どふぞよろしく御禮を申してくれ」といひながら。フックフト氏の机子の上にありし一小銀貨をとり、「此れは少しだけれど、御前への貢だそ」と云ふて與へたりとなん。

と云つて一寸首を傾けて見て『ハ、一中々甘く書けてるな』手習は坂に車を押す如く油断をすれば後へ下るぞ」かど一だ君』甲『オヤ〜えらいね! 君は、百人一首を空に覚えてるじやないか』

弟が下手 三河近藤とき子

或所に幼い二人の兄弟がありました。兄さんは温順くて弟の方が敏捷いから、何でも兄さんより先へ手を出しますので、或日のこと、お母さんが弟を叱責つて「お前は何でも兄さんより先になるがそんな権利はない、弟は何時も兄さんより下手になるのです」と諷しめられました。夫から二人揃つて無筆の友達或町を通つて居ると、道側に『此處車は道井に置くべし』と高札を立て、居る。すると甲『君、此處に書いてあるのが讀めるかね?』『この位なもの、讀めなくつて……』

笑ひ草

二人の無筆

東京はな子

二人揃つて無筆の友達或町を通つて居ると、道側に『此處車は道井に置くべし』と高札を立て、居る。すると甲『君、此處に書いてあるのが讀めるかね?』『この位なもの、讀めなくつて……』